

あがたい
縣居翁・賀茂真淵は郷土の誇り、日本の宝

賀茂真淵翁遺徳顕彰会

会長 山下智之

正月元旦によめる

きのふ世は千さとへだつる心ちして
今日あらたまに春ぞのどけき

賀茂真淵

新春を寿ぎ、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

皆様方におかれましては、健やかな新年をお迎えになられたことと、心よりお慶び申し上げます。

昨年六月二日、先代の皆様の思いを心に留めて再び立ち上げました当会は、皆様の温かいご支援によりまして、円滑な運営をさせていただいております。

念願でした鳥居も浄財をいただいた多くの方々のお蔭で、十月二十三日に大変立派に建設していただきました。きつと真淵翁もお喜びのことと思います。

私どもは参拝する度にお礼をしながら、更なる発展・充実をするために身を引き締めております。

今年も多くの皆様と共に真淵翁の遺徳を顕彰し、計画予定（三月四日、生誕祭）の事業を着実に遂行してまいります。

本年もご指導ご鞭撻のほど、よろしく願い申し上げます。

賀茂真淵翁を知ろう (1) 略年譜

元禄 10	(1697)	1 歳	真淵 3 月 4 日生まれる
元禄 14	(1701)		国学の創始者 契沖死す 大地震で今切渡船途絶える
元禄 15	(1702)		赤穂浪士討ち入り
宝永 4	(1707)	11 歳	杉浦雅子について手習い始める 富士山噴火 宝永山噴出 この頃から姫街道交通盛んになる
宝永 10	(1713)		この頃寺子屋普及
享保 5	(1720)	24 歳	「雨乞いの歌文」を作る
享保 7	(1722)	26 歳	杉浦家歌会で荷田春満に会う
享保 8	(1723)		岡部政長の女と結婚 翌年死別 小笠原源太夫が源太夫堀を作る
享保 10	(1725)	29 歳	浜松本陣梅谷家の婿養子になる
享保 12	(1727)	31 歳	この頃上京し荷田春満に入門？
元文元	(1736)	40 歳	荷田春満死去 (68)
元文 2	(1737)	41 歳	江戸に出る
寛保 2	(1742)	46 歳	茅場町に新居
※40 歳代の著述 『万葉集遠江歌考』(46) 『百人一首古説』(47)			
延享 3	(1746)	50 歳	田安宗武に仕える(5 人扶持)、家焼失
宝暦 5	(1755)	59 歳	古風な居間を作る
※50 歳代の著述 『延喜式祝詞解』(50). 『万葉解』(53).			
宝暦 10	(1760)	64 歳	隠居 婿養子中根完雄家督を継ぐ
宝暦 12	(1762)	66 歳	内山真龍入門
宝暦 13	(1763)	67 歳	近畿地方の旅。本居宣長に会う 東海道の松並木
明和元	(1764)	68 歳	浜町に新居「縣居」と名づける。
※60 歳代の著述 『冠辞考』(61) 『万葉考』(64) 『歌意考』(68) 『邇飛麻那微』 『宇比麻奈備』 『国意考』(いずれも 69)			
明和 4	(1767)	71 歳	栗田土満入門
明和 6	(1769)	73 歳	塙保己一入門 10 月 30 日死去
※70 歳代の著述 『祝詞考』(72) 『語意考』(73)			

夏日望富士山

延享三年（一七四六年）
真淵五十歳

するがなる
ふじの高嶺は
いかづちの
音する雲の
上にこそ見れ

真淵

(注) するが＝駿河 いかづち＝雷



葛飾北斎 「山下白雨」
一八三一年頃の作品
北斎七十歳頃

富士山の頂上付近と下界の雷雨を描いて、大自然の躍動感と富士山の高さを表現する。

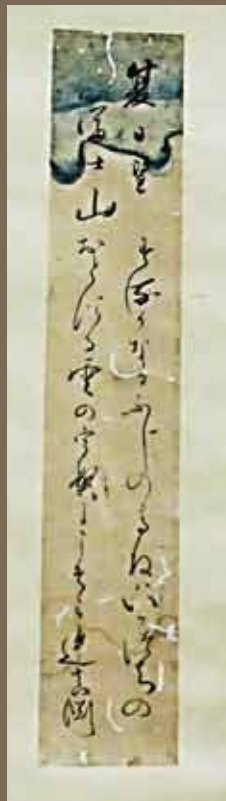
ふじの山

作詞 巖谷小波
明治四三年 一九一〇年

1 あたまを雲の上に出し
四方の山を見おろして
かみなりさまを下にきく
富士は日本一の山

2 青空高くそびえたち
からだに雪のきものきて
かすみのすそをとおくひく
富士は日本一の山

巖谷小波（いわやさざなみ）は、“日本のアンデルセンと呼ばれる。
『日本の唱歌』明治編（金田一春彦ほか編）は、この歌は真淵の「するがなる」にもとづいたものとする。



「夏日望富士山」短冊台紙貼り 賀茂真淵記念館

賀茂真淵記念館から資料提供いただきました。